

## 九州大学山岳部 2016年夏合宿報告書

### ◆参加者

三年：山崎史也 引尻貴俊 田中早紀

二年：明坂将希 藤山誠也 山田剛巳 池田光希 土屋勝太

一年：井上幹大 伊藤朱里 池崎大智 荒木詩乃 福田弘樹 須賀雄二郎

◆山城：涸沢（定着） 表銀座（縦走）

◆日程：8/12~8/23

### ◆行動記録

#### 8/12（先発隊）

天候：晴れ

6：00 上高地

9：00 横尾

11：45 涸沢

長い移動を終え五時に上高地に到着。荷物を預けおよそ20kg程度で登山を開始する。横尾までは平地であり、ひたすら歩くだけ、たいした道ではなくほぼコースタイム通りで歩く。テスト後久々の歩荷に肩の痛みに苦しむ。横尾から本格的な登山が始まる。アルプスの大自然を感じながらの登山となる。ばてるものはいなかった。十二時前に涸沢に到着。展望よし。穂高がそびえ立っており、ようやくここまできたかと多少の満足感に浸る。雪渓がかなり溶けており、雪上訓練は行わないことにし、東稜に行くことにした。

#### 8/13(A 隊)

天候：晴れ

3：30 起床

4：40 涸沢出発

6：40 尾根上  
7：00 ゴジラの背  
順番待ち約 40 分  
8：00 懸垂下降  
8：40 北穂高岳山頂  
山頂にて休憩  
9：30 下山開始  
11：30 涸沢到着

前日に入山を終え、雪溪が予想よりもかなり小さいことがわかったため雪上訓練は中止し、A隊は予定を前倒しして東稜に行くことにした。この日は前日から股関節の痛みを訴えていた一年福田を除くA隊の4人で活動した。朝は少し肌寒かったが、日が昇ると非常に良い天気で日差しが強く、サングラスを着用した。涸沢を出発し、はじめの登りはほぼ階段のようになっていて歩行は簡単で体力的にも問題なかった。南稜登山道への分岐付近のどこかでルートファインディングを失敗したらしく、浮石だらけのガレ場についてしまった。しばらくはそのガレ場を進んだが、途中で引き返した。ガレ場では四つん這いで歩行していた。大きな落石を数回起こしてしまった。しばらく道を探すために歩いていると偶然東稜に向かっているという人に会い、その後ろをついていくことにした。そして何とか尾根上に到着。ここでハーネスを装着し、しばらく休憩した。その後ゴジラの背についたが、先に2パーティがいたため順番待ちをした。その順番待ちの間に休憩をし、さらにその後のためにコンテを組んだ。ゴジラの背は、はじめは一人ずつビレイをしながら進んだが、その後は一人目はフリークライミングで進んでいった。高度感があったがクライミング自体のレベルはそれほど高くなかった。懸垂下降場では先のパーティ1組が先をゆずってくださった。懸垂下降が全員終わるとザイルをしまい、少しのクライミングをしつつ登って行った。私自身はかなり集中をしていたので疲労が感じられなかった。しばらくすると北穂高山頂にある小屋が見えほっとした。最後小屋へ行くときの木でできた梯子は足をのせる部分が非常に小さいうえ、岩壁に立てかけてあるだけのように感じるほど不安定であったため、ひっくり返ってしまいそうで怖かった。山頂には多くの登山客がいた。そこで長い間達成感に浸りながら休憩をした。と

でも良い天気で槍ヶ岳がきれいに見えていた。その後南稜経由で下山した。

8/13(先発B隊)

天候：晴れ

6:15 涸沢発

7:00 南稜分岐

8:45 北穂分岐

9:05

10:05 北穂高-涸沢岳最低コル

10:15

11:10 涸沢岳山頂

11:40

12:00 穂高岳山荘(白出のコル)

12:20

13:10 ザイテングラードとりつき

14:20 涸沢

B隊の内自分を含めた二名は先行して入山していたため、この日はフリーであり、せっかくなので北穂高→奥穂高縦走を行うことにした。それほど時間もかからないだろうと、やや遅めの出発。昨日の入山の疲れが残っているのか、涸沢小屋付近まで登るだけでも息が上がる。涸沢に張ったテントから北穂高に続く一般ルートを眺めるとかなりの急登に思えるが、実際に登ってみるとそれほどでもないように感じられた(急登に変わりはないが)。ルートはしっかりと整備されていて、道に迷ったりすることはまずないだろう。軽く手を使うような登りも存在するが、どうということはない。道なりにしばらく進むと南稜分岐が現れるが、この日は驚くほどに天気が良く登山者が多かったため、分岐地点からでも南稜のとりつきで渋滞が発生していることが確認できる。登りと下りでしっかりとコミュニケーションをとってスムーズに行動しよう。鎖と梯子が架けられていたが、上りに関して鎖は不必要であった。梯子を上ると、南稜の連続するカーブのような道が始まる。それまでに体力の多くを消費してしまっていたため、なかなかペースは上がらないが、ゆっくりと歩を進める。歩行を妨げるような大きな岩は存在しないが、同じような道が続き、精神的にきつい。北穂分岐から北穂山頂までは200m程度だが、今回はスルー。分岐地点から涸沢岳へ向かう。こ

こでの小休止の内にハーネスを装着した。5分程度下ったところで開けた場所へ出ることができ、また、遠くにそびえる檜ヶ岳を望むことができた。最低コルまでの道はクライムダウンの連続で、かなりスリリングな道が続く。鎖が出ている個所ではスリングと環付きで確保して歩けば安心だ。しかしながら、一部ではかなり切れているリッジの上を鎖などの補助なしで通過しなければならないところもあった。バリエーションルートではないのだが、そのような経験が少ない者にとっては厳しいルートかもしれない。最低コルを超えると、次は梯子が続く相当な急登が待っている。ここが今回のルートの核心部であろう。クライミング要素が多分に含まれており、岩には人口的に設けられた足場があるものの、緊張する場面が複数個所あった。仲間とこれが一般登山道であるのかとぼやきながら、頂上にむけてひたすら登っていき、最低コルから一時間ほどで山頂に到着した。頂上は非常に多くの登山客で賑わっていた。厳しいルートに体力を奪われてしまっていたため、かなり長めの休憩をとる。下りに入ってわかったのだが、穂高岳山荘側からの道は先ほどまでの道と比べると非常にやさしかった。登山客の多くはこちらのルートから来られたのだろう。あっという間に山荘に到着し、奥穂のとりつきにかかるが、梯子を前に長蛇の列ができていた。疲労感も相まって、今回は奥穂をあきらめ、ザイテングラードを経由して下山することにした。体力を削られた状態でのザイテンの下りは非常に堪えた。ザイテンのとりつきを超えたあたりからトラバースに入るが、どこからかパノラマコースに入ってしまったため、雪渓付近のルートを通ることになってしまった。終わりには後発隊のメンバーとすれ違い形で涸沢に帰還した。その後は無気力症候群に陥り、立ち上がるのさえ「きつつ」だった。北穂—奥穂は思っていたよりも辛く、計画的な登山が必要だと思った。

## 8/13(後発)

8月13日(土) B隊の半分(引尻、荒木、須賀)+C隊：入山 晴れ

5:00 上高地着

6:00 上高地出発

6:10 河童橋で朝食

6:50 明神

7:50 徳沢

8:45 横尾

10:25 本谷

12:40 涸沢(本谷～涸沢で休憩 10分×2)

14:00 雪上訓練 食料探し

21:00 就寝

夜行バスで予定よりも10分ほど早く上高地に到着。須賀がピッケルに付けていたカバー(軍手)をバス内で紛失。取り付け方が甘く落ちやすかったことが原因。上高地に到着後、デポ等の作業を済ませる。この際、自分がデポするものは予め一袋にまとめ、名前を書いていた人がいた。当日も後日の荷揚げ時も作業がしやすくよかった。食料も日付を書いていたおかげでスムーズに整理ができた。後発隊の荷物を預けるために福岡市指定ゴミ袋(大)×2使用。荷揚げ中、デポするべき荷物の一部をデポしていなかったことが発覚。さらに、個人的に持ってきた本やカメラなどで負担が大きくなる。各々が自分の体力に合わせた余裕のあるパッキングをしてくるよう徹底する必要があるだろう。合宿前に、特に一年生を対象とした荷物チェック兼パッキング講座を開いてはどうだろうか。

8/14(全員)

天候：晴れ

雪上訓練

5:00 起床

6:45 出発

7:00 雪上訓練開始

11:00 雪上訓練終了

13:00～ 東陵(～14:40)・北尾根(～15:20)偵察

16:00～ 夕食

19:00 就寝

風が割と強く吹いていたが、天気は快晴。雪面の照り返しも強く、多くがサングラスを着用していた。

今年は雪が少なく、例年より小さくて状態の悪い雪渓であったようだ。着いたら準備をし、全員でシャーベット状の雪をピッケルでならず。斜面の下に非常用としてスノーバーを使ってザイルを張ったのだが、準備中にスノーバー上部のワ

イヤヤーが切れてしまいスリングで代用した。装備の老朽化について点検の必要がありそうだ。訓練最初は雪面の滑りが悪く、1年生がピッケルでの滑落停止の練習をする際、ハーネスにザイルを結びつけて上級生が下から引っ張る始末であった。途中、ザイルを引いていた上級生が転倒して足首を負傷する場面もあり、安全面をもう少し考える必要があったかとも思う。1年生は4種類の滑落停止を合格がもらえるまで練習し、上級生も仰向けで頭から落ちた時の練習をそれぞれ行った。今回は人数も多かったため、各自最低限は練習できたものの慣れるまで反復というわけにはいかなかった。

その後、スタンディングアックスビレイや、コンテを組んだ時の滑落停止などを練習。スタンディングアックスビレイは雪の状態が悪いせいかピッケルが刺さりきらず、テンションがかかったときに抜けてしまう場面が見られた。ぜひ来年はもう少し状態の良い雪で訓練をしたいものである。体重差のある組み合わせでは難儀していたが、1年生も全員合格ラインに達することができた。

8/15

A隊：屏風岩

天気：曇

0500 起床

0540 涸沢発

0630 コル

0710 屏風の耳

0730 屏風の頭

0745 屏風の耳発

0840 涸沢着

先日の雪上訓練時に A 隊リーダー山崎が怪我し、活動困難のため 2 年と 1 年だけで行動する。2 年 2 名 1 年 2 名の計 4 人。技術的・時間的にも難しくないパノラマコースに行く。道はしまっていて歩きやすく、ガレている箇所は 3 箇所ほどであった。勾配は緩やかでまさにお散歩コースといったところである。コルまでは池田が先頭であったが道を間違えて苦労を強いられたが途中で正規の道に出ることができた。体力的にも難しくなくクライミング要素もほぼ皆無。足に違和感を訴えていた福田が難なくこなせたほどである。コルから屏風の耳までは宝

満山さながらの石積みの道を歩く。一部浮石があるので注意必要だが誰も落石は起こさず。屏風の耳で一年を置いて2年の2人で屏風の頭まで空荷で向かう。ここでも池田が道を間違えてひどくハイマツが密生している場所を強引に抜けていく。レベル的にはそれほどだったがハイマツで足元が見えずそのまま浮石に足かけた時は肝を冷やした。

(B 隊)

奥穂高岳

3 : 30 起床  
4 : 30 出発  
5 : 15 ザイテングラード取り付き  
6 : 20 白出の科尔  
7 : 15 奥穂高岳  
8 : 30 白出の科尔  
10 : 25 帰還

4:30、まだ暗い中 ヘッドランプを使用し足元を照らしながらテント場を出発。涸沢小屋経由のルートをとった。まずは樹林帯の石段を登っていき標高を上げていく。4:50あたりで明るくなりはじめヘッドランプを消す。樹林帯を抜けるとパノラマルートとの合流点に出てペンキをおってガレ場を進むが途中でルートファインディングをミスして登山道から外れる。ザイテングラードの取り付きは把握していたため、そこを目がけてトラバースすることにより登山道に復帰した。5:15にザイテングラードの取り付きに到着し休憩していると小雨にあったためリーダーの判断でレインウェアを装着。5:30にザイテングラードの岩尾根を登り始める。ほどなくして小雨はやんだところでリーダーと1年1名の計2名が先行する登山者につられ沢に迷い込む。リーダーにそのまま沢をつめ途中で合流すると伝えられ、他3名はそのまま一般道をいく。20分後、無事に合流した。ザイテングラードは登りに関しては危険箇所は皆無である。鎖、ロープは設置されているが登りでは利用するに値しない。6:20に白出の科尔に到着するもあいにくのガス。6:30に山頂へと歩みはじめた。科尔の直上は急登、垂直梯子の連続であり先行する人も多く渋滞に遭う。ガスに付け加え風も強く待機中は寒かった。ある程度梯子や鎖による急登を終えると平坦になり、勾配はゆ

るやかになる。この調子が山頂まで続いた。7:15に登頂するも、あまりにも寒いうえ展望もなく一同にあまり感動の笑顔を見えなかった。朝鮮人らが記念撮影している中、順番を待ち、順番がくると素敵な笑顔をして記念撮影。その後、そそくさと退散して帰路についた。白出のコルまでは登ってくる人が来る度に退避していたため、なかなか下降できずにいて8:30、1時間という長い時間を要して白出のコルまで下ってきた。下りのザイテングラードは難なく下ることができた。ガレ場で雨が強まり、滑りに注意しながら涸沢を目指すも濡れた石は非常に滑りやすく、滑るものが続出した。満身創痍でテントに帰還するとテントの一部が浸水。プールができていた。自分の心の中にも涙でプールができた。

#### C 隊：北穂高岳（東稜）

2:30 起床

3:30 出発

5:00 取付

6:50 懸垂下降

7:40 北穂高小屋

10:00 涸沢 BC 帰着

2:30 起床。前日から天候が心配で決行を迷っていたが、雨が降っていなかったので行けると判断。3:30に涸沢BCを発つ。前日の夕飯時に出発の写真を撮らせてほしいと新聞記者に言われていたが、時間になったので待たずに行く。北穂高岳への登山道を登って南稜取付の手前でガレ場をトラバースし、沢の右俣を詰める。A隊に聞いていた通り、○に3つの→がついた目印があり、一般道からの分岐はすぐにわかった。まだ辺りは暗く、前日偵察に行った明坂の言葉をもとに大きな岩を目標にトラバースしていく。5:00取付のコルに到着し、ハーネスを装着する。そこから核心部のゴジラの背までは右から巻いた。踏み跡がしっかりとついており、巻道はわかりやすかった。当然東稜は貸し切り。ゴジラの背では、垂壁をのぼり右に巻く部分で、ピナクルを支点にとりフィックスロープを張った。間の2箇所を残置ハーケンにザイルを通す。その後のゴジラの背のようなギザギザしたエッジはノーザイルで通る。両側が鋭く切れたナイフエッジの難易度はそれ程なかったものの、落ちたら致命的なので怖い。ゴジラの背はあっと



いう間に終わる。思った以上に短かった。稜線を伝い懸垂下降地点へとたどりつく。懸垂支点は残置を利用した。明坂を先頭に降りていく。下降は約 15m。しかし、一年生の懸垂下降は練習が足りなかったようだ。特に油山で練習に参加した場合、初回しか懸垂下降の練習をしていなかった。より練習回数を確保すべきであった。

東稜のコルから北峰までの登りは、初め稜線を右に巻いていたものの、ガレて登りづらくタイムロスした。そのため稜線へと上がる。7:40 に北峰（北穂高小屋）へ到着。ガスで周りの景色は何も見えない。写真撮影したのち南稜を下山する。あと少しで涸沢に着くという 9:30 ごろに小雨が降り出す。10:00 に BC 帰着。雨は本格的に降り出す。その後すぐに奥穂高岳へ行っていた B 隊も帰ってきた。雨は降り続き、午後は自由に過ごす。

コースタイムを見ると、取付までは想定通りだったが、それから後に時間がかかっている。ゴジラの背で時間をかけすぎたこと、東稜のコルから北穂まで適切なルートを選択しなかったことを反省する。

8/16

荷下げ 山崎 明坂 藤山 池崎 井上 須賀  
沈殿 山田 土屋 田中 荒木 伊藤  
東稜 引尻 池田 福田

天候：晴れ

7:50 涸沢発

9:10 横尾

10:20 明神

11:00 上高地着、ゴミ、アイゼンの郵送、デポの回収など 30 分作業

11:35 上高地発

12:45 徳沢

13:40 横尾

16:10 涸沢

16 日の天気予報は雨(15時から雷雨)であった。なので休養を兼ねて沈殿する予定を立てていたのだが、当日は朝から晴れたため、体力の残っていた 6 名(山

崎、明坂、藤山、池崎、井上、須賀)で荷下げ歩荷をすることにした。これは、19日に予定されていた1年生による荷下げ歩荷の負担を軽減することを目的として行った。15時までに涸沢に到着することを目標としていたのだが、行程はとても長くこれまでの疲労も溜まっていたので目標の時間に到着することは出来なかった。涸沢に到着するまでは運よく晴れ間が続いてくれたので助かった。

北穂高岳東稜線 』

7時15分 涸沢発

8時5分 南稜分岐

9時15分 稜線

11時5分 北穂高小屋

当日の天気予報は前日の段階で雨。前日に快沈にしようとなった。しかし、当日起きてみると天気は晴れ。午後からは雨の確率が高くなるとのことだが、テントでじっとしているのは面白くない。よって、常に元気そうな池田とA隊アタックに参加出来なかった福田を連れて東稜に向かうことにする。出発は遅くなったが、12時までに北穂高岳山荘にたどり着ける自信があったので決行した。南稜分岐までは一般道を登るが日差しが強く、非常に暑かった。南稜の分岐で休憩後北穂高沢のトラバースに入る。取り付きのV字の沢は遠目からでも分かりやすく、視界が利けば迷うことはない。

8/17

A隊：北尾根

天候：曇りのち雨

3：00 起床

4：30 V・VIのコル

4：45 V峰

7：00 IV峰

7：30 III・IVのコル

9：45 帰還

予報が錯綜しており、午後までは持つとリーダーが判断したため、北尾根を決行。前日の荷下げ隊に参加した者が多く、往復40kmの負担がもろに来た。V・VIのコルの偵察をしていた池田に先頭を行かせるが、暗いせいか道に迷う。後から来たパーティにコルまで連れて行ってもらう。この時点では星が出ていたが、奥穂方面にはガスがかかっていた。V峰はぐんぐん登る。特にかくことはない。問題は四峰。一昨年登ったはずであったが、全く見覚えがなく、また難しい。こんなはずはないと思いながらも登り進めるのだが、ザイルを出したいほどの登攀が続き、一年生に普段以上に三点支持を徹底させる。その後、福田が200kgはあろうか、畳クラスの落石を起こし、一瞬宙ぶらりんになる。このときほど「死」を意識したことは今後の人生でないだろう。一年生には申し訳ないことしてしまった。あまりのショックでパーティの息は上がり、足の震えが止まらない。一度落ち着き、安全なところでザイルを出す。どうにかIV峰を超えたあたりで天候が怪しくなってきた。Ⅲ・Ⅳのコルにたどり着いたが、さっきの落石からⅢ峰がかなり険しく見える。ここでガスが濃くなり撤退を決断。落石に気を付けながらエスケープルートを下る。

B 隊：北穂高東稜  
天候：くもり後雨

3:30 起床  
4:30 涸沢出発  
5:15 南稜分岐  
5:20 休止発  
5:30 一時撤退  
5:40 様子見開始  
7:00 撤退決定  
7:40 涸沢

天気予報によると天候は稜線歩きに向かないものであったが、起床時は星が見えるほどの快晴で、東稜アタックが予定通り決行されることになった。起床から一時間後にヘッドライトをつけて出発する。30分もしないうちにライトが必要なくなるほどに空が白みを帯びだしたため、ヘッドライトを消して東稜分岐

を目指す。分岐への道はかなりの急登で、すぐに息が上がる。40分ほどで分岐地点に到達することが先日の偵察によりわかっていたため、そこまでは1ピッチで進んだ。休憩中にハーネス・ガチャ類を装着し、東稜取りつきのある大きなルンゼの基部を目指す。歩き始めて10分程度経ったところで、北尾根側から大きな衝撃音が十数秒鳴り響いた。このときには東稜、奥穂、前穂、北尾根のすべてに濃いガスが覆いかぶさっていたため、この音が落雷によるものであると判断。(実際にはこれはA隊が起こした落石によるものであった。)我々B隊の周囲もガスで覆われていたため、素早く一時的な撤退をとる。落雷による恐れのない分岐付近のガレ場で、ガスが晴れ、アタックが可能になるまで様子見を行うことにした。最終決定は7時。それまでガスの動向を見守っていたのだが、相変わらず山頂付近のガスは停滞しており、横尾方面からも、沢沿いにガスが次々と湧き上がってくるようである。途中涸沢方面から登ってきた方から、先の音が落雷ではなく、北尾根付近の落石が原因であったことを教えてもらった。心配は募るばかりであるが、他愛もない会話を繋ぎ、晴れるのを待つ。結局、最終判断時刻7時になっても動けるような状態ではなかったため、完全な撤退を余儀なくされた。萎える気持ちを抑えながら、ゆっくりと下山。テントの中で他のパーティの無事な帰還を祈る。しばらくすると、C,A隊が順に帰還した。両パーティとも大きなけがはなく、胸をなでおろす。A隊に何が起きたのかをヒュッテで耳にし、死線を越えた5人の男たちを皆で労った。

## C 隊

奥穂高岳

天候：雨またはガス

- 3:00 起床
- 4:00 涸沢発
- 5:00 ごろ 道に迷う
- 5:45 ザイテンのトラバースに出る
- 6:44 穂高岳山荘
- 7:27 奥穂高岳山頂
- 8:02 穂高岳山荘
- 8:52 ザイテン尾根を下りきる

9:30 涸沢

20:00 就寝

この日はもともと天気の悪い予報だったが、明け方はガスが少なかった。行動開始時はまだ暗かったので、分かりやすい涸沢小屋裏からザイテンへ入る。しばらくは問題無かったのだが、だんだんルート上の丸印がまばらになり確認に時間がかかる。ついにはまったく見つからなくなり、薄暗いなか地図を見る。尾根を通り過ぎたのではと、北の方にある尾根をめざす。周囲が明るくなってから、南方にザイテンの尾根を確認。あろうことか北穂南稜の南側を登っていたのだ。この時かなりガレ場を登り詰めていたため、下方に見えるトラバースまでガレを下ることになった。幸い足場は安定しており難なく下りていった。5:20ごろ、前穂北尾根方面から轟音が響き、隊に緊張が走る。一瞬雷かと思ったが、巻き上がる白煙を見るに大きな落石があったようだ。このとき奥穂の稜線からガスが下りて来はじめたのでカップを着る。A隊への不安が募るなかトラバースまで下り、C隊は行動続行を決定。奥穂へと足を進めた。

ここからはなぜ道迷いに気付けなかったのか疑問を抱くほど歩きやすい道で、他パーティを追い越しながら進む。山荘から奥穂高岳山頂までは高度感のある岩場で、吹き付ける風に煽られないよう慎重になる。山頂に着くと記念撮影をしてそそくさと退散。下りでは何も持たずに登ってくる登山者も見かけ、いかななものかと憤りすら覚える。涸沢に帰着してから20分としないうちに憔悴したA隊も下りて来た。その後は皆でヒュッテに集まり、お互いを労っておでんを食べた。このまま夕方まで沈殿の如く無為に過ごし、天気予報から翌日の沈殿を決定。かなり遅めの就寝となった。

8/18

A, C 隊 沈殿

B 隊 パノラマコース

天気：雨ときどきガス

5:00 起床

6:25 出発

7:00 屏風のコル

8 : 40 帰還

昨日の撤退から一夜、朝は天気が悪く、B 隊としては沈殿ということが決定した。本降りの雨ではなかったので2年2名、1年1名の計3名でパノラマコースに行くことにした。レインウェアを着用し涸沢を雨が弱くなった6:25に発った。斜面をトラバースしながら徐々に標高を上げていく当ルートは思っていたより道が狭く、雨で濡れていたの注意して進まなければならなかった。しかし、ロープ、くさりがたくさん設置されていたため QUAC である我々にはイージーであった。屏風のコルに難なく到達すると雨は止み、ガスっていたものの一部の晴れ間から一瞬 梓川を拝むことができた。携帯の電波が入ったため、携帯を使用してから涸沢に戻った。帰還後も天気が優れなかったため、テントやヒュッテで各々の時間を過ごした。

8/19

A 隊：沈殿

B 隊：北穂高岳東稜

6 時 15 分 涸沢発

6 時 55 分 南稜分岐

7 時 55 分 稜線

10 時 00 分 北穂高小屋

13 時 00 分 涸沢着

前日からの不安定な天気に悩まされ朝 4 時前からテントの外を覗いてみるがガスに覆われていて何も見えない。5 時前に再び覗いて見ると見事なモルゲンロートをみることができ、涸沢中からシャッター音が響く。アタックを決断し、朝食を済まし東稜へ向かう。南稜の分岐真での登りは3度目となるがやはりきつい。南稜の分岐にたどり着き休憩するが、東稜は完全にガスの中である。展望は全く期待できない。前回の反省を生かし、北穂高沢はかなり下部をトラバースした。比較的歩きやすいとは感じたが1年生2人は少し苦戦しているようだったが、2年生がフォローしていたのは心強い。ガレの登りに入ってから、安定している草付きの際を登る。ガスで岩についたココケがよく滑った。稜線に登って

からは前回と全く同じルートをたどった。唯一の違いは視界が利かなかったことであるが、二回目と言うこともあり問題なかった。

C 隊（田中、伊藤のみ）：パノラマルート

天候：晴れ一時ガス

5：00 起床

6：00 朝食終了

6：20 B 隊東稜に向け出発

6：33 C 隊（田中、伊藤）パノラマルートに向け出発

7：45 屏風のコル

8：20 サイノカワラ

8：35 屏風ノ耳

8：45 屏風のコル

9：36 涸沢ヒュッテに到着

パノラマ行の話は昨日から予定されていたが、当日の天候を確認してから最終的な判断が下されることになっていた。当日の朝起きてみると、午前いっぱいを持つだろうという判断により、正式に行動することとなった。準備をしながら、B 隊が東稜に向け出発するのを見送る。6：20 にテントを出発する。コルまでの道はガレ場や勾配の急な岩場が連続する気の抜けない道だった。アップダウンが頻繁に繰り返されるので、ギアチェンジにもだいぶ気力を割いてしまっているような気がした。ヒュッテとコルの中間あたりの地点で一旦休憩をとり、地図を確認する。7：45 コルに到着。コルには茶色の分岐が立ててあり、それによると耳までは 600m ということだった。右手の景色が開けていたので上高地が見えないかと目を凝らす。残念ながらガスが出ていて見えなかった。コルからは勾配の激しい岩交じりの道が続く。雷山よりも大丈夫なはずだと自分に言い聞かせつつ、15 分ほど登ると池（水たまりが大きくなったくらいの規模）に出る。このころには、昨日の雨かガスの水気かわからないが、それらをまとった植生をかき分けて進むような道が続いたため、ズボンが濡れていた。池から少しのところの岩場に、赤い文字で「↑サイノカワラ」とあったので、その地点からごつごつとした岩場に行く。ルート表示が見つげにくかったため、方向のめどをつ

けながら登っていく。サイノカワラには二人の故人のプレートがあった。ガスが出ていたためほとんど何も見えなかったが、晴れていたらさぞかしすばらしい眺めだろう。いったん赤い文字の分岐まで下り、今度は分岐の左側へと進み、屏風の耳を目指す。ガスが出てはいたが、開けた稜線を行くのは気持ちがよかった。耳らしきところについたが確信が持てなかったので地図を確認する。地図にも表記のある三角点を見つけ、ここが耳だと確かめる。ここにも男性のプレートがあった。ガスの間から、涸沢ヒュッテが見えた。時間に余裕があったので、もう一つの耳にも足を延ばすことにする。ガスが出ていたため残念ながら槍ヶ岳などの北の方面は見晴らせなかった。晴れていれば槍・穂高の大パノラマが展望できるという。またここに来たいと思った。頭への道は地図によると要注意ルートであり、天候も持つかどうか怪しかったため今回は断念した。帰りの下りは気がせてガレ場で足元の注意が足りないところも見受けられた。気を付けたい。ロープなどで手の置き場が整備されているところが多くあった。感謝せねばならない。

12時頃から14時半頃まで、一年部員に誘われ、知る人の間では有名だというヒュッテ近くにある巨岩でボルダリングの練習をした。ビレイしあいながら、クレッターを着用して行った。ルートファインディングの練習にもなり、実りある時間を過ごすことができた。

8/20

全員

天気：曇のち雨

0500 起床

0605 涸沢ヒュッテ発

0655 本谷橋

0746 横尾

0900 頃 デポ回収隊発

1400 頃 デポ回収隊着

道の状態に関して特筆すべきことはない。入山日のことを参考に。先日の荷下げほどの速さではないがなかなか早く横尾についた。気象予報では曇りで晴れる



だろうと思っていたが昼過ぎから雨が降り始めた。山の天気は簡単には分からないものだ。

8/21 (ここから縦走)

天候：晴れのち曇り

4：00 起床

6：10 槍沢小屋

10：00 殺生ヒュッテ

11：00 槍ヶ岳山頂

12：15 帰還

台風の心配から極力荷物を減らして縦走に向かう（これが後に物議をかもし）槍沢までの道は整備されており、かなり歩きやすい。人気ルートなだけに槍沢キャンプ場に着くまでに渋滞に巻き込まれる。それ以降渋滞に巻き込まれることはなかった。大曲からの登りはかなりキツかった。実際ここら辺から隊のなかで遅れるもの、疲れが出ている者が現れた。殺生に着くと槍がよく見え、行かずにはいられなかった。槍のはしごは、画像で見るより陰しく緊張した。一年生全員を槍に上がらせることができよかった。ここで満足感からか縦走に行きたくない者が出た。実際、台風が近づいており引き返す選択肢もあった。そこで、リーダーが情報を小屋から聞いて判断することになった。結果はGO判断。直撃ではなく、勢力が弱い、また、我々が山岳部として活動しているということが判断の材料となった。

8/22

天候：晴れのち曇りのち雨

5：00 起床

8：00 ヒュッテ西岳

11：45 大天荘

前日の台風の予報があったため、当日の状況判断となったが、起きてみると空に

は青空があった。いよいよ縦走が始まったのだが、東鎌尾根が予想よりもかなり険しい。もっと楽な縦走路を思い浮かべていたが、はしごはあるは、岩の壁が出るはで、かなり消耗した。最後の西岳の登りはくじけそうになった。台風の足が遅いため午後まで天気が持つらしく大天井まで行くことにした。ここで疲れからパーティが二つに分かれ始めたため、二つに分けて行動することにした。また、この縦走路はかなり歩きやすかったのだが、展望があまり良くなく、ほぼトレーニングであった。大天井ヒュッテで長めの休憩をとり、幕営地に向かう。夜に台風らしい風と雨にブチ当たったが、大丈夫であった。予報では、深夜に通り過ぎる戸のことだったが、早朝まで風が弱まることはなかった。

8/23

天候：曇り

4：00 起床

7：00 燕山荘

7：20 合戦小屋

8：30 中房温泉

風が吹き止まぬ中起床したのだが、行動に支障はないようであった。今日下山ができるということで隊の士気が違う気がした。東の空で雷雲があり、一抹の不安にかられるが、下山の力が吹き飛ばしてくれる。燕までの道は、縦走路らしい縦走路であり、歩きやすく、自然とスピードが上がる。赤土からだんだんと花崗岩が増えて行きゴールが近いこと告げる。大下りを目の前に一年生に若杉の最後の登りとどちらがキツいか訪ねたところ、若杉と即座に返ってきた。やはり宝満～若杉を超えるものはなかなかないらしい。下山パワーで歩いていたためあまり覚えていないが、かなり歩きやすい整備された縦走路であった。燕山荘に着くころには、雨が降り出した。そして合戦尾根を駆け下りる。冬の下見をかねていたのだが、あまりの急登に身が震えた。これは冬の登山は検討しなければならないだろう。無事に中房温泉につき、至福の湯に浸かる。

#### ◆個人の反省

山崎史也

今回が初めてのリーダーとしての合宿であったが、しっかり役目が果たせた

のか、不安である。果たして私がチームの中でリーダーとしての価値を生み出すことができたのか、信頼を得ることができたのか、リーダーシップを発揮できたのか、まだまだ未熟である自分が腹立たしい。残り半年となった部活動で後輩に何を伝えることができるのか、日々考えながら活動したい。また今回の私の中のテーマは『あきらめない』であったが、これは縦走を行うという形で達成されたので良かった。一人一人が目的やテーマを持つことで、よりバリューを生み出せる合宿になると思うので、チーム目標と個人目標を持たせることにしようと思う。

最後に今回後輩に助けてもらうことが多くあった。今回の合宿の成功はひとえに、後輩の頑張りがあったとあってよいだろう。まだまだ未熟なリーダーであるが、もっと頼りになる人間へ成長し、これからの九大山岳部の繁栄に少しでも貢献できたらと感じる。

## 引尻貴俊

今回の合宿は最上級生として望む初めての合宿であり、これまでの合宿とは比べ物にならないほど楽しみと不安が多かった。ただ、その不安のおかげで山城調査やルートへの把握などを徹底的に行うことができ、よかったと思う。

反省点としては、1年生の事前の指導不足である。懸垂下降のやり方があやふやなもの、Fix ロープの通過のやり方がわからない者などがおり、その当時は少し頭にはきたが、自分たち上級生の指導不足が原因である。命に関わることなので合宿前にテストをするなど必ずできるようになって連れて行くべきであった。また、山城や活動日程を全く覚えていない者もいた。これを把握してないと、万が一遭難した時などの初動が遅れるなど良くない。それだけでなく、山の楽しみが減ってしまうように感じる。もう一つの反省としては、奥穂の登りでルートを見失ったことである。これは東稜のバリエーション気分が抜けていなかったためだと思う。普段の山行では慣れた山を歩くため、赤テープや赤ペンキをほとんど気にしない。しかし、初めて歩く道ではしっかりとマークに導いてもらわなければならない。その後の山行では注意したがマークを追って歩くことにも慣れるべきなのかもしれない。

良かった点は体力とご飯の質である。今年は歩荷の回数が多かったため隊の体力水準は高かったと思う。2年前涸沢までの登りでかなりの時間を要したので今年も覚悟したがほとんどコースタイム通りの時間で登ることが出来た。博多駅

で中本さんから頂いた 3kg ほどあるスイカや荒木の父から頂いたプレミアムモルツと外郎による歩荷量の増加もなんのそのであった。今合宿はご飯がとてもおいしかった。白米の失敗が一度もなく本当に感動した。中には、白米を炊く練習を事前にしてきた1年生もいて感謝している。朝ご飯にも新しいメニューが加わり、棒ラーメンを排除できるのも時間の問題だろう。

合宿全体を通じて楽しかった印象が強い。自分はインターンシップの関係で早めに下山したが、まだ山に残りたいと思った合宿は初めてだった。現在もインターンシップ先の独身寮で記録を書きながら、次はどこに登ろうと考えている次第である。

### 田中早紀

一年生への指導は怒るべきところはきちんと怒っておくべきだった。二年生任せにしていた。さらに全体のことについてリーダーに頼りすぎたと思う。反省する。だが頼りになる2年がいて心強かった。最後の夏合宿で重大な事故なく、縦走まで遂げたことはとてもうれしい。

合宿届について、私のミスで提出が出発前日になってしまったので、一週間前には提出を。

入山について、2組に別れて入るのは行動しやすく、よかったと思う。課題は入山のときの歩荷重量に差がありすぎたこと。適切な分配をすべきだった。

クライミングについて、油山での練習にも懸垂下降を毎度取り入れるべき。

テント生活について、食事は1年主導で用意でき、テント内でも私が知る限り悪いところはなかったと思う。ただ、欲をいえば出発時はより迅速に先輩より早く行動できると望ましい。

金銭について、帰りの交通費が足りるか心配する1年が多かったなので、合宿前にそのような情報は提供すべき or 質問すべきだった。

記録について、個人差はあるが、丁寧な記録を皆とれていたと思う。

荷下げについて、荷物を学務に送る場合は事前に電話連絡を。(学務は部活内で完結してほしいそうだった)

### 明坂将希

今回はテント内で過ごすのが苦痛に感じられた。私はメンバー内で共通して

話せるような話題を持っておらず、黙っていることが多かった。それに耐えかねるともはやテント外をぶらつく始末であった。定着では常に行動を共にするのだから、もっとメンバー内で会話をして、絆を深めておくべきだったと思う。

また1年に対して多々気になる点があっても、ほとんど注意できなかった。1年を鍛える機会をみすみす逃してしまったことは、他の上級生一同に申し訳ない。今後の合宿では積極的に1年を指導していくつもりだ。

最後に全体を通して、今合宿はとても実りあるものであった。2年として合宿計画を詳細まで把握する、現地での計画変更の判断に関わるなど、来年度の合宿の主体として必要な知識を身に付けることができた。来年の夏合宿を具体的に考える礎となってくれるだろう。また、1年の存在により上級生としての責任や役割も感じることもできた。これらを今後の成長の糧にしていきたい。

## 藤山誠也

今回の合宿は2年生になって初めてであり少し違った合宿を経験できた。1年生は未経験者はやはりテント生活についての知識と技術が欠乏していて何度か注意が必要だと思ったところはあった。今年は雨が皆無に近いほど降っておらず雨天時のテント生活をあまり経験されてあげられなかったのがおしかった。定着が多かったのもあるだろうが縦走時に1年生がテントから出るのが遅かったのは天気が荒れていたなら一喝ものだった。上級生はもっと厳しく言うべきところは言ってあげるべきだと思う。さてここまではテント生活であったがここからは活動についての反省をしたい。定着時はA隊単体での行動が多かった。A隊行動に関しては北尾根以外では特筆することはないだろう。北尾根時道がわからず四峰でかなりの時間を割いたのは痛手だったし落石が起きた時はザイルを使っておらずだしねおいたほうが良かったのかもしれないと反省している。危うく一年1人を事故死させかねないところだった。三四のゴルでの撤退判断は極めて妥当な判断だったと思う。縦走時に関して、食料をギリギリに詰めていたため台風接近時沈殿すれば食料が危うくなる問題が発生した。自分はリーダーに素早くはっきりと提言すべきだったと思っている。自分から全体に不和の流れが出たと考えれば少し遣る瀬無い気持ちになるのだ。しかし、「船は重油で動き、人は飯で動く。」これは不変の真理であり私の譲れないところ。結局沈殿がなかったから良かったがあその時は食料への不安が心にひしめく負の感情と混合し不安定な状態になっていたのだ。縦走時までなると身体中にガタがきてす

ぐに息が上がるようになった。これを乗り越えられたのもひとえに飯と行動食のおかげだと思っている。今回は充実した内容の夏合宿を味わうことができた。感謝である。

## 山田剛巳

上級生として一年生に歩行や登攀について教えることができ、少しは先輩らしく振舞えたのではないかと感じている。しかし、一年生が知らないことが多く合宿前にもっと時間をとって色々、あらかじめ教えてやれたことは多かったのではないかと感じている。そうすれば一年生は幾分、精神的に楽に合宿を遂行できたのではないかと考える。

おかずが尽き、ごはんのみで食べるシーンが複数回あった。やはり、ごはんのおともは持参するべきだと感じた。

定着合宿において天気が悪いのは沈殿を意味し、天気は非常に重要なファクターである。ザックにテルテル坊主をつけておくのは有効かもしれない。試してみる価値はあると思う。

合宿後半に行動が連続していたためかパフォーマンスが低下した。やむを得ない側面もあるが、僕はまだまだ強くなれると確信している。無尽蔵の体力を手にするべく、昨シーズン怠っていたランニングを習慣化していきます。

来年で夏山も最後。最上級生となる。かつての自分がそうであったように憧れの先輩のように後輩たちが僕の背中を見てついてきてくれるように日々の練習から気を引き締めて真剣に努めていきたい。

## 土屋勝太

今回の合宿で反省すべき点は装備の管理である。初日の夜にヘッドライトをとりだしたとき、電池が液漏れを起こしており使用することができなかった。準備時には使えたはずであるのだが、どうやら移動途中で破損してしまったようだ。これからは移動中もザックをずぼらに扱わないようにしたい。もう一つは積極性である。連日にわたって行動が続いたときには、作業をほかの人に任せてしまうことが多かったように感じる。きついのはみんな同じなはずであるので、自分よがりにならず、みんなで作業を分担し、協力していきたい。体力面に関しては、思っていたよりも支障はなかった。きついと感じる場面はあったが、それでも隊のスピードについていくことはできたし、送れた仲間の荷物を持つまでの

余裕があった。このことは評価できる。来年は最上級生として後輩たちを引っ張っていかねければならないが、今のままでは知識・実力ともに不十分である。今回の合宿のように僕たちの先頭に立ってくれた3年生たちのようになるため、これから一年間不断の努力を行っていききたい。

## 池田光希

今回の夏合宿は初めて2年生として参加した長期の合宿だった。今までは先輩方に精一杯ついていただけだったのが、後輩に教える立場となったのだ。しかしまだ実力も伴わないことも多々あり、先輩として実力不足であったと感じている。また、定着では問題もなかった体力も後半の縦走に入るとすごくバテているのが分かった。長期の合宿でもしっかりと保てる体力をつける必要があると大いに感じた。

## 井上幹大

度々体力の無さを痛感するところがあった。普段の歩荷よりも重さが軽く、ザックの重心も背中側にあり安定していたが、長時間の行動にはまだまだ慣れない。日にちを重ねるにつれて少しずつ慣れてはいったが、疲れが溜まっていったのもあり、縦走が始まった頃から登り始めから足が動きにくくなることが増えた。様々なストレスで心的にも少しずつ不安定になり、後半は現実逃避をすることが多くなった。縦走が日程通り5日間であれば恐らく集中力が切れて怪我をしていたのではないかと思う。歩荷量はそこまで重くなかったが個人装備を少し充実させ過ぎたところがあり、軽量化の余地が見られた。次からの合宿では今回の個人装備の使用具合を見て内容を改良していきたい。

日程全体を通して自分の行動を優先させたところが多く、他の人に迷惑をかけたことがあった。自分に甘い性格は知っており、それは今までずっとそうだったので治そうにも治せないが、人に迷惑をかけるのは話が変わってくるのでそこは常に意識して改善していきたい。

今回が初めての合宿だったため今回が良い合宿になったのかそうでないのかは分からないが、怪我をせずに帰ってこれたのはとてもよかった。食事に関しては、僕は食料計画ではなかったのほとんど考えていなかったが、合宿中に改善すべきところをいくつか見受けられたので次の学年合宿では食事をもっと充実させたものにしたい。

## 荒木詩乃

何はともあれ、体力づくり、歩行技術とクライミング技術の向上は必須だと思った。自分はまだまだ歩荷量も少ない上に特に登りの時はついていくのもギリギリの状態が多く、同級生に共同装備をもってもらった場面もあった。来年からは上級生となるのだから、せめて自分の装備くらいは最後まで持ち通す程度の体力はつけたいし、自分の体力への自信のなさから荷下げなどの行動に消極的にならずに済むようになりたい。また慣れないガレ場歩きでは何度か落石を起こしてしまったし、合宿後半になると大事には至らないものの元来の捻挫グセにより度々バランスを崩してしまった。普段の練習でも歩行時に足が内向きになることは指摘されていたので、安全のためにも常から意識して歩行技術を向上させることが必要だ。クライミングも東陵にて明らかにおかしい登り方をしてしまった。ジムに通ってクライミング時の体の使い方や必要な筋力を身につけたい。

今回の合宿では夕飯作りの時に米を炊くことが多かったが、水加減なども先輩方に教えていただきながら少しずつ上達が図れた。おいしいごはんはモチベーションにも影響を与えることがよくわかったので、安定しておいしいごはんを作れるようなろうと思う。

とりあえず今合宿は大きな怪我もなく無事にやり遂げることができてよかった。また空いた時間もスケッチやボルダー練習や支点の取り方講座など有意義に過ごすことができたと思う。しかし同時に自分の技術や山に関する知識量などがまだまだ未熟であることも大いに感じた。改善すべき点はいくらでも見つかるので、ここで感じたことや学んだことも活かし、精進していきたい。

## 伊藤朱里

一番反省すべき点は、入山時にもって上がるはずのコメ一袋（予備日三日目、22日）と本来デポするはずのコメと野菜（22日分）を誤って逆に持って行ってしまったことだ。冷静に考えればわかるような間違いに、上高地で気づけなかったことが恥ずかしい。それ以前に準備段階で先輩から言われた通りあらかじめきちんとデポ袋をつくっておくべきだった。知識があやふやだったため、食料などはうやむやになってしまっていた。行動に先立ち予備知識をしっかりと頭に入れておくことを徹底したい。



体力面に関しても不安が残った。通常の活動とは違って、合宿中は疲労が蓄積していくことを見越してよりトレーニングの内容をより充実させるべきであった。

本来ならもっと周囲とのコミュニケーションをとるべきであったが、自分から、という姿勢が欠けているところが多々あった。

また、朝の行動は一年としてもっと迅速に行うべきであった。ヘッドライトの絶縁を切っておらずもたついたことがあった。行動の見通しをしっかりとたてておきたい。

全体的にすべて受け身であった。これからは二年になることを見越して、体力づくりはもちろんのこと、全般的な知識の習得、クライミング技術の向上などを中心に力を入れたい。

## 池崎大智

反省すべきことはおおきく二つある。一つ目は縦走の時に毎回テントから出るのが遅かったことだ。私はまず食事を済ませるのが遅く、それに加えて荷物を小分けにしすぎていてまとめるのにも時間を要してしまった。そのためテントの片付けの際に先輩方を待たせるようになってしまった。朝はパッと行動できるようにしたい。さらに出発への準備も遅かったため、共同装備が少ししか残っておらず、あまり共同装備を持てず、部に貢献できていないように感じた。とにかく準備を早くしたい。二つ目はクライミング技術が低いということだ。北尾根での落石以降、僕はとても怖くなってしまった。たしかにその時の落石は尋常ではなかったが、もう少し自分のクライミングに自信が持てればその怖さも緩和されたと思う。後期は苦手なクライミングを頑張りたい。

## 須賀雄二郎

体調を崩すことはなかった。ただ、奥穂の下りと最終日の下山時にはかなり足が疲労していた。山は下山時に事故が起こりやすいと聞くので、下山が終わるまで足が疲れないような鍛え方をしなければいけないと思う。具体的には、登り下りの多い雷山での歩荷を頑張りたい。クライミングに関しては、ATCを装着する位置を忘れる失態があった。山の概念把握と行動計画の把握もしっかり出来ていなかったのも、そういう自分のテキトーな心持ちは改めなければいけないと思う。

## ◆係の反省

### 食料

(土屋) 今回は食料係として主にエッセンを担当したが、いくつか反省すべき点があったと思われる。まずは良かった、及びこれから継続してってもらいたい点である。それは、ポテトフライだ。これがなかなかの高評価であった。放送の形態により多少かさばってしまうものの、軽いので歩荷量を減らしてくれる上、なによりおいしい。また、エッセンの中で「塩味」という役割も担ってくれるので、非常に優秀である。さすがはポッチ君だ。次に改善すべき点であるが、ずばり、カルパス(キャンディータイプ)である。カルパスは今回のエッセン計画では一日一人二個と、全体ではかなりの数量が必要になったため、おやつカルパスとキャンディータイプのものに分けて用意した。合宿中ではおやつカルパスは最終日までおいしく食べられたが、後者は味の劣化が激しく、とても食べられたものではなかった。今後は計画的に、すべてをおやつカルパスとして用意した方がいいだろう。またドーナツは合宿を通して粉塵と化してしまい、食べにくくなるため、避けた方がいい。最後に、今回はし好品をすべて1から買いそろえたのだが、少し足りなかったようである(200人前用意した)。また、テントごとに分けていたのだが、消費スピードの違いから在庫に違いが出てしまっていた。夕食前に数合わせを行うなどして対策すべきであった。

(池崎) 反省すべきことは二つある。一つ目は食料の袋の表記が消えていたり、わかりにくかったりして、いつの食料なのかよくわからなくなってしまったことだ。そのため上高地に後半の分をデポするときに誤って前半の分をデポしてしまったことがあった。またミネストローネをもっていったが、液体タイプのものであったため非常にかさばって、やむをえずその日の食料はミネストローネと野菜に分けていたが、表記がわかりにくかったため他のカレーなどの食料と間違ってしまう、野菜はあるが肝心のミネストローネの素がないという事態になってしまった。だから次回からはもっと表記をわかりやすくしたい。表記方法をしっかり統一したい。また表記を黒色だけではなく、他の色も使っているとわかりやすいと思ったので、次回はそれに取り組んでみたい。二つ目はガス缶の使用だ。私は初日に中身が少なくなっているガス缶から使うように

言われたが、それ以降そのことをすっかり忘れてしまい、いろいろなガス缶をバラバラに使用していた。そのため後半の縦走にも多くのガス缶をもっていかなければならなくなってしまった。後半は前半の疲れが残っていて、少しでも荷物を軽くしたい、そんなときにこのミスは大変良くなかったと反省している。次回から徹底したい。

改善したいことは米の量である。今合宿では一人につき米一合で計算していたが少し多かったという声があった。少し減らしても良いかもしれない。逆にカレーなどのルーは最後につぐ人の分がなくなってしまうということがよくあった。つぎ方にももちろん問題があったが、それでもすこし少なかったのではないかと思う。あとはタンパク質の摂取である。合宿は長期間でさらに温度管理ができないため肉をもっていくことは大変難しいことであるが、何か方法があればと思う。

良かったことは新作の炊き込みご飯が結構おいしかったことだ。(個人的にはかなりおいしかった)しかし改善点を付け加えるならば、セットにしていたスープのボリュームがなく、食事が炊き込みご飯のみようになってしまった。もうすこしボリュームのあるスープとセットにするとよいと思った。合宿中の隊員のモチベーションを上げるためにもさらなる新メニューを考えたいと思う。

(須賀) 調理に時間をかけられないという制限があったため、計画段階で苦労した。先輩からアドバイスを貰い、数回の修正を経た。合宿を終えて、個人的には朝食の献立に満足している。特に餅は特別感があってよかった。朝食のセットはテント毎に分けられるようにしておいた方が、分量に関する不公平感がなくてよいと思った。

## 装備

(池田) 今回初めて装備係を担当した。装備係は夏合宿中にする仕事よりも合宿に行く前にすることの方が断然多くて、テストともかぶり大変なことも多かったがあまり大きな問題もなく全体的には良かったと思う。ガス缶も有り余るほど持って行ったが、去年の反省も生かした結果で正解だったように思う。ただ改めるべきこといくつかあった。

まず 1 つ目に冷蔵庫だ。今回も例年通り雪溪に穴を掘り、腐りやすい野菜やソーセージ、それにビールなどを埋めて保存しておいた。しかしカラスに荒らされるという事件が起き、危うく下山しなければならない危機に陥るところだった。その食料危機を招いた 1 つの要因として、保冷効果を高めるために緑色のレジャーシートをかけておいたことが挙げられる。真っ白な雪溪の中に緑色のシートをかけておくということは自分たちからしたら目印になっていいが、動物たちからしたらそこに食料が隠されていると教えてあげていることに変わらない。レジャーシートを使わなくても、穴を深く掘り目印には自然の木などを使用することが望ましいと思う。

そして 2 つ目にトランシーバーだ。前回の冬合宿で無線機の片方が故障して使えなくなり、修理するか新たに買い替える必要があった。ただ山で使用するような無線機はアマチュア無線免許の 4 級の資格を持っていなければならず、合宿までに用意することはできなかった。実際、今回の夏合宿では 3 パーティに分けられ互いに連絡をしないと何も状況がつかめないことも多々あった。次回までになんとかして無線機を使える状態にしておきたい。

(荒木) 今回は装備係を担当した。今年は 1 年生が多く入部したこともあり、鍋やアイゼンなどの共同装備が部室にあるものだけでは足りないことがあることが分かったのだが、私は備品の買い出しなどを先輩に任せきりにしてしまい自分から積極的に動くことができなかったことをまず反省したい。また、雪上訓練の時にスノーバーが壊れたり、ガスヘッドが 1 つ使い物にならなくなったりなど部室にある装備も老朽化しているものもあるようなので、安全に使うためにも一度部室の道具を点検した方がいいのではないかと思う。ちなみにガスヘッドは 1 つ減っても滞りなく飯の準備はできたため、今合宿程度の規模なら初日のような鍋物以外なら米鍋×2 とチタン鍋(大)×1 でも大丈夫そうだ。

合宿中に装備の不足で困るということは特になかったと思うが、1 年生で飯の準備をする際にガス缶の使い方が徹底されておらず効率よく使い切ることができなかった。装備係として、また仮にも経験者としてこのような基本的なことに気がつけなかったのは大きな反省点である。

## 気象

(明坂) 今合宿はほぼ毎日のように天候に悩まされた。何より信頼できる天気予報が無かったのがつらかった。そういう場合にこそ天気図の読図が重要となるのだが、涸沢で見れる天気図は連日複雑で、正直お手上げだった。天気図からの予報をもっと勉強しておくべきだった。しかし涸沢ヒュッテの予報も連日外れていたあたり、素人が予測できる範囲を超えていたのかもしれない。とはいえ、これからも天気図の勉強は続けるべきだ。

## 医療

(藤山) 腰痛 3 名、頭痛 1 名度々、捻挫 1 名、刺傷 1 名、足に痛み多数 (1 名は股辺りに違和感)、咳 1 名

私が合宿で確認した傷病の統計である。其々軽く説明しておく。腰痛は時間を置けば治るものが多いが 1 名は転倒による腰痛を訴えていたが処置を行わなかった。頭痛に関しては今回は解熱鎮痛剤を医療箱に入れておかなかったため、また当人も過去に前例があるにもかかわらず持ってきていなかったために処置のしようがなかった。ただ、彼に関して言えば高度を急にあげた時に発症するので休ませる若しくは高度を下げれば治るものであるから薬の処方なくして乗り切ることができた。ここで咳 1 名についても同じ事例である。医療箱には総合感冒薬が含まれておらず対処のしようがなかった。捻挫 1 名はテーピングによる固定と当人の自己治療である程度は乗り切った。刺傷 1 名は雪上訓練時にアイゼンが大腿部に刺さったものであった。アイゼンの爪は雪溪上の汚れやもともと付いていた汚れのため大変不衛生なものであるので直ちに簡易治療を施す。本人は痛みをあまり訴えなかったが万一を考えてしっかり処置しておくべきだと判断した。合宿後も傷口以外に問題はないようなので安堵のため息が出た。足の痛みの多くは皮が剥げた、内出血を起こした、靴擦れした、といった内容が多くこれに関しては各自が処置していただきたいものだ。流石に医療班が処置するほどのものはなかった。

医療箱に総合感冒薬と解熱鎮痛剤を足しておくべきであったと思う。他は問題なかった。

(伊藤) まず準備段階について、先輩からのアドバイスを受け、医療箱の中身に不足がないかチェックし、包帯は古くなっていたものを新しいものに買い替えた。これが自発的にできたらよかった。合宿中は、部員がめまいや足の痛みを訴えることもあったが、これといった対処ができなかった。先輩の知識頼りになってしまった。知識、経験ともにこれから増やしていきたい。調子の悪そうな部員に声をかけることも、自分自身に余裕がなければできないことだが、今合宿では自分の体力がもつかどうか不安だったため、行動中に周囲を気にする余裕がなかった。日頃の活動やトレーニングを通して、体力をつけていきたい。

## 交通

(山田) 計画の段階ではバスの予約も予約開始と同時で実行することができたし汚点は見つからないのだが、先発隊の広島で乗り換えにミスがやはり反省すべき課題であろう。乗り換えるホームも記載しておいたので 2 分という時間で乗り換えるのは可能であるが階段に近くなければ終着駅かつ繁忙期では難しかったのかもしれない。かといって名古屋にバス出発一時間前に着くためには、あの計画でなければならなかった。つまり、今回の悲劇を回避するためには一日で名古屋までは行かず大阪、京都の関西圏までの行程にして計画にゆとりをもたらす、または 18 きっぷを使用せずに飛行機、新幹線などを利用する二択が考えられるだろう。この件については、メンバーの総意に基づいて決定していきたい。また、人身事故などによる遅延にも遭遇したが運が悪いとしかいいようがない。出発前に神社に行って願掛けするぐらいしか対策はないので、ここでの議論は避ける。